

岡山大学経済学会雑誌33(1), 2001, 67~80

## 《翻 訳》

カール・レンナー

## 『民族：神話と現実』(2)

太 田 仁 樹

偶然に本を発見 (第32巻第4号)  
序言 (第32巻第4号)  
民族の生い立ち (第32巻第4号)  
主権を持つ法的権力としての民族国家 (本号)  
民族的共同体の法的緊急状態 (本号)  
インターナショナルの基体 (本号)  
インターナショナルの法的誕生  
国際連盟  
総連盟の憲法  
講和条約のマイノリティ保護  
純粋なマイノリティと不純なマイノリティ  
国内の法制度としての民族的マイノリティ  
混合国家におけるマイノリティ国家  
信仰, 民族, 国家  
国家的絶対主義と民族的絶対主義  
ナショナリズムの急転回  
諸民族の物質的存在

## 主権を持つ法的権力としての民族国家

提起された問題に答えるために、まず民族 (Nation) の内的構造を度外視して、さしあたりは無条件に全体として民族を考えてみよう。それは、その国家において自由な組織そのものとして現われ、主権の担い手つまり自由で平等な法的人格として国際法上の承認を得る。このような法的人格が国家である。国家としての民族とは一体何であるべきであり、また何でありえるのか？ また社会のなかでは何なのか？

民族についてのこの根本問題に対する解答を求めるあいだは、第二の問題をまず省いておこう。その取り扱いはこの研究の第二部に残しておく。ふつう民族が国家になっていて、それゆえ現代のこの時期には歴史的発展の本来の担い手になっていることが真実であるが、地表の地理的な姿態、種族集団 (Völkerschaft) の原初的な定住の不規則性、諸民族 (Völker) の歴史的運命、交通と経済の現代的必要が、純粋な民族国家への地球の完全な分割を不可能にしてしまったことも真実である。完結した

民族国家の内部に異民族マイノリティが見られるのは、一部は民族の定住地域の周辺においてであり、一部はその中の飛び地においてである。諸民族は空間的に混合され、経済的必要により互いに結びつけられるので、民族的な混合国家、二あるいは三以上の民族の混合国家が不可避となる。この事実は、後にわれわれにとって特別な問題となる。この混合民族や破片民族の法的運命はどのようなものなのか？ 彼らは歴史的な伝統的状态においてなおも法の外部にとどまるのであろうか？ それとも類似のやり方や特別なやり方で民族の法形成の歴史的プロセスに参加するのであろうか？ われわれはどのような発展を予期すべきなのか？ 第二部「国法上的人格としての民族」において、この問題は答えられるであろう。まずわれわれの思考の道筋に戻ろう。

1789年から1919年までのヨーロッパの発展においても、諸民族の言語－文化共同体が、数百年にわたる静かな成熟の後に、政治的な受身性から脱出し、歴史的使命をもつ権力であると自覚し、権力行使の最高の道具としての国家を意のままにすることを要求し、まず政治的な自決を、まもなく他の諸民族と並ぶ確固とした影響力を追求する。第一にこの意志は、経済における一世紀半の資本主義的生産様式の革命的な力の結果として生じた転換の影響を確かに受けている。だが地表の限定された一部をその排他的な利用に確保し、将来のために権利主張することは、民族の基本的な使命である。国家領域を経済的に利用することが第一の民族的目標であり、ちょうど今世紀に好んで「国民（民族）」経済と呼ばれる経済が当然にもその意志の重大な動機である。それは物質的な基礎から出発するが、たしかに意志であり、それゆえ精神的なものであり、根拠のある意志であり、目標への意志である。その目標は「民族的理念」の形で個々人に迫る。それは本質的に政治的な理念であり、「ナショナリズム」の政策を導く理念である。

いまや、とりわけ一つのことが明らかである。民族が植物的な状態から脱しようと努める限り、経済的・文化的にほとんど全てとなった民族が、法律적으로는無であり、下僕を持つどの世襲君主も数百万人の民族よりも強力である限り、民族は権力を得てそれによって行動することを望むに違いない。ある日バリケード上で計り知れない犠牲を払って自らに獲得したが、再び無力となるような権力ではなく、法によって与えられ保証された権力、法律的に整備された公的権力を望むということである。民族は、自分自身を整え、内的な任務を遂行するために、この権力を最高の権力、国家主権そのものとして必要とし、少なくともある期間、ある個人、ある王朝、ある党派にそれを委ねる。

そして同じく明らかなのは、民族が他の諸国家に伍した一国家として主権をもてば、異民族国家の権力に委ねられたくないということである。民族理念は、おのずと内的自由および外的自由の二つの姉妹理念とともに実現され、自己を維持するのに必要な権力を追求する。外的自由とそれを支える対外的な権力は、国家諸民族の関連領域を越えてわれわれを相互に交わせる。

われわれは法的な人格としての民族の誕生を描写してきた。今や法的主体が存在し、同等の法的諸主体との関係が生ずる。

ではその諸関係はどのようなものなのか？ それらはどのように整序されるのか？ それらは単に事実的な性質を持つものなのか、それとも再び法律的な性格を持つものなのか？

歴史的発展が提起する問題にとって、この問題の射程は次のようなものである。法律的な権力の奪取によって、従来の言語－文化共同体は初めて完全な意味での民族となる。国家と法はその創造者で

あり、その民族同胞個々人に対する内的関係において、国家と法とはそれ以後にも強大な支援者である。それ以後にそれはどうなるのだろうか？ 法の創造力は、民族国家の勝利、「民族」という国際法的人格の創造により、突然なくなるのだろうか？ いまや世界の舞台で、民族は他の民族と並び立ち、無責任に対立し、無政府的に自由で、エゴイスティックな我が儘以外の何ものにも縛られず、自力以外の何ものにも頼らないのだろうか？ かくして民族の法的承認の歴史的な過程は、いまや突然停止し、法は民族を創ってから、いまやもはやそれ自身の被造物から離れ、被造物が主権をもつようになったので、それをより高度な法的秩序に編制しようとしもしないし、その力もなくなるのだろうか？

私は、世界大戦の勃発直前の1914年3月7日に、ウィーン大学で、社会主義学生を前にある講演をし、それについて簡単に見解を明らかにし、この問題に対して答えようとした<sup>[原注1]</sup>。民族についての純粋に政治的な把握であるナショナリズムは、民族のなかに歴史的要因を求め、権力を追求し、他の諸民族（Völker）に対する権力行使を期待するだけである。しかしその際、法はせいぜい権力の刑吏である。民族を法と調和させる他の見方が考えられないだろうか？ 今日では全世界はこの調和の方へ歩んでいないだろうか？ 民族の政治的理念から、民族の法的な理念への上昇が存在するのではないだろうか？

かの純粋な政治的理念も法的な理解と要求を含んでいるのは明らかである。——とりわけ民族全体と民族同胞との関係においてそうである。だが、そのすべての前提によれば、民族そのもの、すなわち絶対的人格が法の下ではなく、法の前や上に存在するのである。この思いこみはわれわれの法学の支配的方向のなかに援軍を見つけている。それによれば、国家はあらゆる法の源泉である。国家が法律によって確定するものは実定法であり、他のすべては法ではない。何らかの形だけでも認められるやいなや、幸運な篡奪者が命じることが法律であり、同時に法でもある。地球表面が分割され、法的領域が相互に接している。あらゆる国家を超えて浮かんでいるような法は真空のなかの法のようなものだ。だからどの国家も不法をすることはありえない。国家がすることはその主権の発露である。民族も国家も、神の世界秩序、人倫的理念、法そのものの実現に役立たない。「権力のために配慮することは、国家の最高の人倫的義務である」とベルンハルディは言っている<sup>[原注2]</sup>。彼は世界大戦まで、帝国主義的ナショナリズムの指導的な思想家としてドイツで知られていた。ナショナリストにとって権力はすべてに優先するものである。彼が構想している世界像のなかでは、民族は互いに繋がっていることはなく、無条件に存在するものであり、だから互いに無秩序に、荒野の猛獣のように存在するものである。彼らのあいだでは、ホップズの万人に対する万人の闘争（bellum omnium contra omnes）が永遠に持続する。自己の維持と拡大の義務は、より強くなるまで時機を待ち、他者を政治的に屈伏させ、少なくとも経済的に搾取するように、誰に対しても要求する。だから戦争はナショナリズムの不可欠の方策であり、それはこの政治的民族理念に固有のものである！ 「戦争は人倫的な必然である。」——たんなる悲惨な災禍ではない。「政治的な理想主義こそが戦争を要求とする。他方、唯物論は少なくとも理論においてはそれを拒否する。」（ベルンハルディ、同）戦争を止めさせる努力は、「それこそ非人倫的なものと呼ばれるべきで、人間の尊厳を冒瀆するものとして非難されねばならない」と著者はいっている。

同様のイデオロギーは、国家間に存在する何らかの法的状態の否認、さらに国家を超えた法の合目的性と必要性の人倫の名による拒否に基づいている。明らかにそれは、——少なくとも諸国家相互の関係において——人間の法的共同体を無秩序な相互関係と闘争に置き換え、法的思考をある種の猛獣哲学に置き換えるものである。それは兵舎と兵器庫で地上を覆い、それらを道徳的な施設であると見なす。それは人殺しを文明の第一の動力として説明し、自然な価値評価を大きく逸脱し、暴力行使、殺人、掠奪、さらに戦争——さしあたりは悲しむべきだがしばしば避けられない悪である——を、人倫的な企てであると公言するに至る。それは自ら民族的であると排他的に称している！ 特に、この暴力崇拜がドイツの哲学全体の完全な拒否、まさしく転覆をおこない、カント、フィヒテ、ヘーゲルの焚刑を要求しているということを看過しているドイツ人の知識人は、何という墮落であろうか！ 暴力崇拜は、世界大戦以前にドイツの上流階級の民族的思考を支配している。上流階級は、古典期以来のドイツ精神において生じていた根本的革命を意識することがなかった。このイデオロギーは法の思想と何の関わりも持たなかった。それは明らかに法的秩序が通用しない領域、すなわち人間がなお野獣の法則すなわち肉体的生存競争の下にあるところから出てきている。古いオーストリアにおいてこのような思考方向が流行したとき、グリルパルツァーが、「人間性を出て、民族性を通り、野獣性へ至る」と、痛切な悲嘆を感じたことは知られている。

にもかかわらず、今日特殊な「ナショナリズム」と呼ぶことのできるこのイデオロギーは、大戦以前にドイツだけでなく多くの帝国主義国家をも支配していたことは全く明らかである。異った思考は、多かれ少なかれ大逆罪と見なされ、罰せられた。戦争の後遺症でなお精神が批判的な雰囲気の中にかあった最初の数年間は、ナショナリズムは士気阻喪しているようであった。戦後の経済的混乱、経済的困窮を原因とする社会的な失望、多くの講和規定の不条理と不正、要するにこの時代の精神にもたらされた幻滅が新たにそれを目覚めさせ、今日のファシスト運動においては、それは非常に尊大で野蛮な不寛容にまで到達し、民族についての他のどのような考えも非民族的、民族裏切り者的であると不遜にも非難するまでになっている。それは、国家権力を握ると、国家と法と公的暴力を濫用し、野獣哲学を信条とし、異端糾問所に背く精神的創作物を焼却し、隔離収容所によって精神と知識を奴隷にし、法治国家の秩序すなわち近代の最高の成果の一つを否定し、そして——これから見るように——何らの民族的な欲求や目標をも達せられることなく、自民族大衆を言語を絶する悲惨に突き落とす損害以外の何ものもたらさない。

もし永遠に互いに猛獣のように待ち伏せし、再三再四互いに襲いかかり、餌食にすることが、諸民族の最後の世界史的運命であり、ついには中国人や日本人のように、西洋のすべての成果のなかでも銃の撃ち方を最も早く習得することができるとすでに実証されて、将来多くの労働力と多くの銃剣を意のままにすることのできるであろう民族（Volk）の獲物に、順々になるのならば、諸民族にとって本当に悲しいことであろう。

### 民族共同体の法的緊急状態

しかし国家間には有効な法的状態がなく、強制的な法が存在しない、それゆえ諸国家には生存をめ

ぐる最大規模の肉体的な闘争である戦争以外にないという、歴史的経験によって再三確認された明白な事実にナショナリズム哲学は立脚しているのではないかと。そして多くの民族 (Völker) が不正なものだと思っている戦争が、巨大な領土獲得という報酬を伴って成功裡に完成されるのは最近はじめのことではないであろうか？

この問題に答えるためには、われわれは個々の人間の像との比較で、国家を多人数であるにもかかわらず心理学的な一個人のように考え、感じ、意欲する、ずっと強力な手段によってではあるが似た行動をする百万の人間として考察しよう。この百万の人間の背後に、数千倍の利害と志向をもつ経済領域がある。それと並んで同じ本質を持つ他の百万の人間がいて、同様ではあるが対立する別の利害と志向がある。それはエクメーネ (Ökumene) というより高度な共同体へ繋がりをうが、その分裂の虞れもある。国際法上の主権をもつ個体が併存していて、その法的な相互関係が今や特別にわれわれの関心を引く。法学者としてわれわれは、それらの間に法的状態が存在するか否かの研究に自らを限定する。

国家内部の諸個人の関係が国内法で規制されるように、国家間、集合人間相互の関係は国際法によって規制される。それは諸国家そのものと同じくらい古い、国内法に較べて発達の遅れた法である。しかしそれは現実的な法である。そして戦争そのものも諸国家の法的に規制された行動なのである。まずわれわれは国際法を取り上げ、それが1919年の講和条約締結までどのように効力を持っていたのかを見よう。

「法とは平和である！ 法とは、神の意志のうえに打ち立てられたものと考えようと、自然の状態とか、人間の理性のうえに打ち立てられたものと考えようと、世界の安らかな秩序である。」法についてのこの表象はわれわれの魂のなかに千年来の伝統として植えつけられている。前世紀の自然研究と社会研究が、ダーウィンの生存闘争によって自然の平和な秩序を解体し、神の望んだ社会的秩序やフィジオクラートの「自然の秩序 (ordre naturel)」が、マルクスの階級闘争やイエーリングの「権利のための闘争」によって解体するまで、法についてのこの表象は、法学的思考をも支配していた。現代の弁証法的な思考が明らかにしたところによれば、法は闘争を廃棄するのではなく、形態を変え、野蛮さを取り払い、文明化するだけである。

二人の隣接した領主は、ベルリヒンゲンのゲッツ (1480-1562) の時代までは、なお正当な武力自衛の範囲で土地をめぐる争っていたが、今日では、彼らは裁判官の前でその問題について民事訴訟争いをしている。国民 (Staatsvolk) 内部の二つの党派は、中世の諸身分のように、数百年前には憲法の規定をめぐる内戦までもおこなっていたが、今日では、文明社会で行動するかぎり、選挙での投票用紙や議会での票決によって互いに闘っている。われわれの先祖は、白刃による闘いで時々成果を宣誓によって強固にしたが、われわれは公刊された書籍や法令集で確認する。われわれは、それによって不和の原因を小さなものにし、そうして闘争を文明化するだけでなく、係争問題の数も少なくするのである。われわれはもはや神の判決や私的な暴力を当てにすることはなく、裁判官の判決や集中した公的執行を当てにするのであるから、社会的講和条約締結の結果としての法は、以前よりも、あるいは文明が暴力行為によって破壊されているところよりも、ずっと高い内的権威と外的承認を得ている。それによって諸党派が法に異議を唱える根拠と可能性はさらに少なくなる。この意味

で、確かに法は平和に役立つ。——しかし闘わない、無気力な、人間の行動力を眠り込ます平和には役立たない。法は人間の生存闘争を文明化するだけでなく——闘争は持続する——、その対象を移動しもある。それは、既決事項として係争外に置かれた多くの係争問題から人間を引き離す。——封建時代の強者の権利は既決事項をほとんど知らない。法は人間を、武力闘争から知恵比べに向け、原始的な、今や既決の目標から新しいより高度な目標に向ける。法は、その目標において生存闘争を人間化し、その手段において闘争を文明化する。

したがって文明化と人間化は、法の任務であり、法は生存闘争を肉体的な舞台から知的な舞台へと移動する。

たまたま出会った原始民族の野蛮で無規制な果たし合いは法的制度ではなく、単なる事実経過である。しかし武力自衛は、裁判官の前での訴訟に比べればみじめで幼稚であるにしても、すでに一つの法的制度である。果たし合い、武力自衛、訴訟は、文明化と人間化の三つの異なった段階である。

法をめぐる闘争は、したがって生存闘争の転移である。闘争は持続する、それは今日歴史上かつてなく激しいものであるが、手段と目的において転換している。それは二重の意味を持つ。

1. 法を創り出す闘争、新たな法、新しい法律の秩序をめぐる闘争である。民法の訴訟に当たるものは、ここでは代議体をめぐる選挙・投票闘争であり、そこでの選挙・投票闘争である。闘いの手順は、選挙規則と議院規則で規制される——それはいわば公法的訴訟手続規則である。立法議会の決議は新しい法を創り出すことで、闘争を封じ込める。かつては内戦がここでの唯一の方法であった。民主的議会主義が、新たな法への唯一の正当な方法であり、法創出の秩序ある訴訟手続きである。

2. 権利を追求する闘争、すでに創り出された個々の法の執行のための闘争である。訴訟手続きと裁判所制度がこの闘争を規制する。判決は法律上の請求権を確定し、国家の執行権がそれを保証する（かつてはここでは果たし合いが唯一の手段であった）。自救行為は訴訟手続きではなく、野蛮への後戻りである。

こぶしと槍で、法を創り出し権利を追求する重荷が軽減されるなら、そのことで人類はより浅薄になり、もろくなるであろうか？ 反対に、この重荷の軽減は、われわれの精神を研究に向け、勇気を山、海、空という自然の征服に向けた。法の祝福は、われわれをより賢く、より深く、より強く、より大胆にした。

そしていまや、世界戦争に責任を負う世界の諸国家の法的緊急状態がある。諸国家と諸民族は互いに接触せずに、その志向と利害の交錯なしに、生きているのではない。人口と経済の発展が事態を変えている。法的な保証を得ようと努力しなければならない利害があれば、彼らは他人の恣意に委ねることのできない、遂行しなければならない既得の権利を持っている。だから彼らは、諸民族間の真の法的な秩序の創造に対する欲求がある。しかし彼らは、今日なお、法廷も執行機関もなしでその権利を追求しなければならず、共通の会議も決議もなしで、新しい法の創造のために努力せねばならない。諸国家相互の関係においては、今日なお、闘争を文明化し人間化する機関がないのである<sup>〔原注3〕</sup>。

国家間の権利主張および国家を越えた権利主張を立証したり執行するには、二つの方法がある。「むき出しの自力救済によっておこなわれうるか、あるいは法という方法でおこなわれうるかである。」（グロッシュ『国際法における強制』23ページ）争う者たちが「恒常的に組織された社会の成員

でないならば、その係争は法律を基礎にして決定する裁判官によっては決着をつけられない。彼らには、組織された共同体において常に規制されている平和な交通という好条件が欠けているのである。それゆえに彼らは、誰に対しても法的にその人に属すべきものを指定する法律の利点を、不幸にも奪われているのである。彼らが自分のものだと思ふものを本当に獲得したいなら、むき出しの暴力によって敵を倒す以外にはない。彼らが闘争の対象を獲得するか、敵が強すぎて敵からそれを奪い取ることが出来ないと悟るまでそれは続く。その場合、もしそれを理解するのが遅すぎれば、彼ら自身が滅びてしまうことさえ起こるかもしれない。だからここでは、粗野な力、強者の暴力が決定する。両者が恒常的に組織された十分に強力な社会にいるならば、事態は異なっている。」

しかし残念ながら、法という好条件が欠けているというこの不幸は、今日でもある程度まで、すべての国家にある。その上、法律も裁判所も法の執行機関もないことがある。だから今日の状況においても事実上は、それらが法だけに従い、法という土台に立脚するといっても、それらは自力救済を頼りにしている。今日なお、経済よりも、秩序正しい法手続きの欠如が、はるかに戦争の原因なのである。

つまりわれわれは、今日では国家相互の関係においてはなお自力救済が権利の追求のほとんど唯一の手段であるという、真実でかつ痛ましい結果になっている。そして法学的に考察すると、この欠落は繰り返し戦争の原因となるにちがいないし、しばしば国家の法が損なわれ、正当な要求が満足させられない。しかし自力救済はそれ自身つねに不法であるわけではない。ある場合には実効的国内法も、自力救済を正当だと認めている。正当な緊急防御（民法典227条、刑法典53条）、当局からの救いが適宜に得られない場合の正当な自救行為（民法229条）がそれである。緊急避難行為は法の外部にあり、合法でも違法でもない（刑法典54条）<sup>〔原注4〕</sup>。

国家間のすべての他の紛争にもまして、戦争が明らかにするのは、民族が権利主体になるにしても、みすばらしい法秩序のもとでは、享受する権利保護もさしあたりみすばらしいものであることである。われわれは、民族国家の創造を、民族の法システムへの編入過程の終点だとか最高点だとは考えず、第一歩だと思ふのである。

そして、全世界の世論にとって予期できないことであつたが、戦争の終わり頃に、ゼウスの頭の中からアテネが出てきたように、国際連盟の理念が出現し、講和条約の中で実現された。諸民族を超えた最高権力の不可欠性という考えは、たちまち共通の確信になり、政治家たちのもとに姿を現した。彼らはその不可欠性をほとんど信じず、それをウィルソンの教授風の気まぐれだと嘲笑していたのだが、もはやその実現を拒む勇氣はなかったのだ。こうしてついに戦争前の外交は、常に悪を望みながら善をなす力となった。もちろんこの善は萎縮したものであり、理念そのものにとって危険なものとなる虞れがある。

民族が一度法を土台としてしまえば、人間の発展に停止はなく、民族は有能な最高権力の下に国際的な法秩序に組み入れられるにいたる。そしてこれは、新しい将来の段階、民族の思想史における第二の段階である。この段階は、1919年以来始まっている。ナショナリストがそれに抵抗し、今すべての悪魔たちがそれを誹謗しているようだが、それはやってくるのだ。

従来この段階では、民族主権の追求は発展促進的で革命的であつた。新しい段階では、民族主権の無

制限の特別な地位への固執は発展阻害的で反動的である。以前の「権利のための闘争」は、「権利に抗する闘争」への努力、すなわち生成しようとしている法的権力に反対する不法な反逆となる。しかし、この最高の権力は、それが基本機能を果たす場合にのみ、有効となりうる。それは、共生の規範を定め、欲求の増大につれて変更もする、すべての民族の会議を必要とする。それは、諸民族の承認された権利の追求と、それに属する執行権を暴力なしで可能にする裁判所を必要とする。それは、会議の決議を基礎として共通の利益に配慮する、あらゆる民族の上に打ち立てられた恒常的な行政を必要とする。最後に、それは反抗者を屈服させる武力を必要とする。要するにそれは、公的権力の、つまり国家の本質的メルクマールをなすすべてを、個別国家の主権を制限する諸方策を、断固として必要とするのである。

これらのものが必要不可欠であることは、絶対最高・無制限・不分割の権力としての民族国家の主権概念が、歴史的には一時的なものであるに過ぎないことを示している。中世や古代にはそれはなかった。中世の長い数百年における公的権力の二元性は、それが分割可能なものであることを示している。現在、われわれはこのような二元性を別の方向で必要としている。最高権力は組織された共同体としての諸民族の連合と個別の民族国家との間で分割されるべきである。その際に民族が権力に——通常は不確かな権力に——託すものを、民族は法と権利享受の保証の他の側面において獲得する。あらゆる民族 (Völker) のインターナショナルな法共同体がなければ、本当の、裁判官に護られ、執行機関によって保証される諸民族の権利はない。民族の法理念は「インターナショナル」にのみ実現しうるものである。「インターナショナル」という表現を、ここでわれわれは法概念として導入している<sup>[原注5]</sup>。全く違った時代には、「エクメーネ (Ökumene)」(教会の世俗領) や「ユニヴェルザーレ (Universale)」(中世の教皇権や皇帝権の世界帝国) の概念によって表された事実関係や法(権利)関係は、諸民族が担い手であるような歴史的時期には、インターナショナルと表現するのがふさわしいものとなる。

### インターナショナルの基体

私は、世界大戦の勃発の4年半前、1910年5月1日に、ウィーンの月刊誌「デア・カンフ (Der Kampf)」に、「世界組織を！」と題する論文を発表した。ダンテの警句として有名な言葉が冒頭に掲げられた。「おお、人間よ！ いかにも多くの騒乱と損失に、いかにも多くの失敗に、汝は苦しまねばならないのか、汝が多頭の怪物となり、汝の望みが分岐するがゆえに。」そして私は次のように書いた。「人間たちはその家である地球を諸国家に分割し、それらは互いによそよそしく敵対的に脅しあうにいたっている。人間たちは、偉大な労働—文化共同体を、諸民族、諸国民に切り裂き、彼らは互いに致命的な武器、殺人的な陸砲と船砲で武装し、互いに撲滅を目論むにいたっている。」私は、世界のこの無秩序化の進行に抗して、人間がそうってしまった多頭の怪物に抗して、マルクス主義陣営で初めて、世界組織の理念を提起した<sup>[原注6]</sup>。これは比類なく偉大で崇高な目的であり、全く偉大な歴史的理想である。第一に、すべての自力救済的な権力の除去による真の法—平和秩序であり、第二に、事実上最終的に全世界つまりエクメーネ (Ökumene) であるこの概念の二つの要素が、そこでつ



いに真実になる。「世界大戦まではこの理想は美しい夢想だと思えたが、世界大戦の勃発後は不条理 (ad absurdum) であることが論証された夢想である。」<sup>[原注7]</sup>戦争の最後の年に私がこれを書いたとき、多くの読者にはそれが本当に馬鹿げたことに思えた。1919年に国際連盟組織においてその実現の道が開かれることになる考えの全体を、そのころ私は予兆的に示した<sup>[原注8]</sup>。だがこの著書においては、私はこの理念の幻想をもてあそぶことはせず、世界組織の遅延が許されない事実、その集積と強化の進行、眼に見えるその発展傾向を提示した<sup>[原注9]</sup>。私はそこで次のような問いを出した。インターナショナルは現実であるのか？ 事物そのもののなかにインターナショナルにたどり着くような発展法則、諸民族を分裂させる帝国主義の疑うことのできない物質的諸傾向に対抗する物質生活の諸傾向があるのか？ マルクス主義者として、確かにわれわれは、社会主義の崇高な理念を、歴史上たぐいえない崇高なこの共同体思想の倫理的な力を喜ぶが、もはやわれわれの先輩であるユートピア主義者のように、理念だけに頼ることはない。われわれは、社会主義が目的論的な目印であるだけでなく、歴史的因果性の所産でもあるという証拠を要求し提出するのである。われわれはユートピアを社会主義の科学に取り替えるように努めるのである。

奇妙にもわれわれは、インターナショナルの研究にこのような努力をこれまで注いでこなかったもので、ユートピア的なインターナショナルであった。われわれは、世界のプロレタリアートの代表が3年ごとに祝祭会議に集まるという荘厳な事実満足して、このインターナショナルという言葉で周期的な会議と常設の事務局を考えるのに慣れていて、だが両者は、その背後にある現実には生きている共同体の眼に見える表現にすぎない。それこそがインターナショナルであり、組織はせいぜいその代表なのである！ その代理による会議が開かれなかったり、除去されたりしても、おそらく世界から一民族も消え去ることがないように、すべての機関を失っても、インターナショナルが消え去ることはありえないであろう。世界で事態に強制されてインターナショナルに向かうものすべての共同体がこの思想の目に見える具体化として組織されていなくても、それらは存続する。

物質的な原因がなければ、理念のインターナショナルは生成しなかった。あきらかに人間の経済的、国家的、文化的、精神的な諸関係において、この思考を生じさせる事実があるにちがいない。インターナショナルというものは、すでに現在の事物のなかに予期される将来における統一へと融合する傾向を持つ諸民族が離れ難く結び付いているという事実、何らかの方法で基礎づけられていなければならない。このような事実があれば、この事実の複合全体が現実のインターナショナルであり、インターナショナルの思考はその表現にすぎず、その組織は意識された表象の一形態にすぎないのである。諸民族の共同体そのものは、それが共同体であるかぎり、「インターナショナルなもの」であり、各民族は、その共同体とは別にそれと並んで、その特殊性、独自性を持つかぎり、それは「ナショナルなもの」を表している。地図を手にとり、その上の様々な区画に諸民族の支配地域を書き込み、緯線や経線しかその上に引かれていないのを見れば、ナショナルなものだけがあり、それを超える上位の共同体はないと言いたくなる。地図は、境界や諸民族の区分を表現するという課題だけを持っているので、欺くのである。そのかぎりでの地図も嘘をついている。それは諸民族を結びつけているすべての深い共同性を故意に無視しているからである。

地図がほとんど王家の支配範囲だけを記していた時代があった。諸民族は、将来の大いなる発展の

いまだ法にまで成熟していない基体であり、その中に埋もれていた。いまやわれわれは、今日の法的な国家間秩序の表面の下に、われわれがその法の出現に立ち会っている新しい基体が成熟していることを証明せねばならない。それまでまだ法的な表現を持たなかったこの新生物を、まず諸事実のインターナショナルと呼ぼう。

基礎的な事実は、今日では一時的な反射光として、世界経済や世界交通という言葉で表される地球全民族の共同体である。それは近代生活の単なる国家を超える外的現象では決してない。それはどんな最貧の人のテーブルやかまどにも入り込み（ブラジルからのコーヒー、中国からの茶、海外からの冷凍肉等々）、彼らの下着、衣服、履物を捕捉し（合衆国からの綿花、アルゼンチンからの毛皮等々）、彼らの職場に浸透し（あらゆる大陸からの原料）、耕作地の農民を圧迫し（シカゴやロツテルダムの取引所の価格指標による）、外国為替相場によってどの商人の財布のコインの購買力をも変化させる、等々。民族的な特別精神が今日望みのない闘いをおこなっているのは、次のような進歩的な認識にたいしてである。世界経済におけるいわゆる「国民（民族）経済」は、互いにますます密接に絡み合い、どの個別の経済もますます他のすべてを頼りにしている。どのような生産にとっても、価格が、成果の尺度であり、どのような労働にとっても、賃金がそうである。今日では価格と賃金はすべて世界市場価格に依存している。民族的な経済諸領域は関税によってこの依存性に逆らっているが、結局無駄に終わっている。商品の出入りは平均価格に対し、資本の出入りは平均利潤に対し、労働者の転出入は平均賃金の方向に対して影響を与える。アウタルキー思想は現在それに闘争を行って、今日では反動を引き起こしているが、長期的には見込みのない闘争である。

インターナショナルな交通—経済共同体、すべての経済領域の隙間のない相互依存、世界市場によるすべての経済成果の最終規定は、世界の最も理解しやすい現実なのである。

このインターナショナルは存在している。それは、世界戦争によって一時的にいくらかは傷つけられ、今のところ戦後恐慌によって耐え難く妨げられたが、もはや破壊することはできない。それは、世界恐慌で非常に先鋭になっている一時的な経済恐慌の狂乱によっては片付けてしまうことはできない。このインターナショナルはまた、大会も、事務局も、機関紙も持たないが、現実のものである。それは、競争の法則によって、インターナショナルな労働市場、商品市場、資本市場で自立的に運動をする。この法則がその代わりもなしに無くなってしまえば、西洋の経済は停止する。

経済—交通インターナショナルは、世界戦争後に発展した航空交通と無線電信によって刺激を受けたが、その刺激の成果は今なお萌芽の状態である。どの公的行政の有効範囲も行政手段の有効範囲によって示される。百年前には、ロンドンからスコットランドに到達するのは、今日インドに行くよりも時間がかかり、困難であった。今日ではある意味で地球全体が、百年前のイベリア半島よりも狭くなっている。一般的な意識は、この関係の変化を驚くべき不思議だと——まだ当分の間——受けとめている。それが経済的、社会的、政治的に能力を発揮するや否や、その力は世界の生活全体をつくり変えるだろう。

新しい交通インターナショナルは、今や私的生活と社会的生活の全体に深刻な影響を与える。それは全世界の衣装替えをする。まず第一に、文字通りに衣装について。ドイツの縁無し帽子、シュタイアーマルクの粗毛布帽子、ポーランドの槍騎兵の帽子、トルコの縁無し帽子等々は、ナショナルなも

のであった。しかし今日では、日本からサン・フランシスコまでの全世界で人々がかぶっている帽子には、ナショナルな差異は許されない。絹フェルトであるかうサギのフェルトであるか、パナマか普通の藁か、すなわち富裕か貧困かが、差異のすべてなのである。スコットランド人の腰巻きと肩掛け、イングランド人のスペンサー・ジャケット、ドイツ人のラシャの上着、アルプス地方の人の粗毛布ジャケット、スロヴァキア人の羊皮等々は、ナショナルなものであったが、今日では中国人も、イングランドやドイツやロシアの市民とほとんど同じ衣料品を身につけている。燕尾服、タキシード、フロックコート、片前背広等々、すべて世界市民が身につけ、まだ階級的差異があるだけで、民族的差異はもはやない。それでもなお諸民族を区別したいなら——以前は外的な差異があったが——、今日では、それを示すために衣服のどこかに三色の帯を付けなければならない。普遍の世界市民という特別種、珍しい！ 以前、民族はその成員を画一化したが、今、インターナショナルは人間を画一化し、身につけた三色帯によって民族であることを思い出すことができるにすぎない。この画一化からはずれるものは例外と見なされ、非文明人の服装とか制服とか指標であると見なされる。

行動も衣服と同様であり、口調も流行と同様である。社会的な研磨である。そしてわれわれの外的生活のスタイルも同様である。ロンドンやシカゴでウィーン風カフェーハウスに行き、ウィーンやブダペストでアメリカ風バーに行き、世界中でドイツ風のビアハウスに行く、等々。われわれの気晴らしと、そのための技芸は始まったところである。サーカスや雑技や蓄音機や映画——周辺のジャンル！ インターナショナルということはたしかにわれわれの社会的存在の一部ではあるが、他の部分は土着で故郷に根ざしナショナルなままである。しかしナショナルなものの多くは世界を巡り、インターナショナルになる。ウィンナーワルツや黒人ジャズがそうである。

インターナショナルな交通共同体は、こうして経済生活を大きな隊列に形成するだけでなく、私的な存在を個々に作り上げる。それが新しいエクメーネ（Ökumene）である。エクメーネという単一共同世界経済領域は、民族国家の閉じた経済領域とは対照的である。この対照はインターナショナリズムとナショナルな帝国主義との対照のなかにイデオロギー的に反映している。

ある特別論文で<sup>〔原注10〕</sup>、私はアウタルキーを求めようと努める国民（民族）経済と世界経済との間の弁証法的対立がまさに戦後の経済的・政治的な特徴となっていることを詳細に説明した。国民（民族）主権の法思想は、経済生活においてアウタルキーの名で思い浮かべられるが、政治的にだけではなく経済的にも崩壊に直面しており、その一時的な高揚は瀕死の者の生の輝きに過ぎない。

完結した国民（民族）経済への世界経済の侵入は、次第に諸民族の経済的特殊構造を解体し、それを平準化する。商業や信用流通と同様、工業生産もまったくインターナショナルなものである。資本主義が突き進むところではどこでも工業資本、商業資本、貸付資本、土地所有における伝来の資産形態を打ち壊す。いたるところでそれは、生産手段所有者と労働諸力とを分離する。いたるところでそれは、勤労人民（Industrievolk）を二つの階級に、生産手段の所有者と無産のプロレタリアとに引き裂く。いたるところでそれは、前者を大中小の規模の工業家、商人、貸付資本家に分類し（大ブルジョア、中間階級、小市民）、プロレタリアを工業労働者、農業労働者、奉公人に分類する。いたるところでそれは、いわゆる勤労諸階級の上に官僚層を置く。西洋文化世界全体を通じて、同じ階級は、他の諸階級に対して似たような位置にある。最初は人民（Volk）同士の利益の共通性はなく、た

だ相似性があるだけであり、似たような行動を引き起こすだけである。全世界の農業者、小市民、労働者等々は似たような敵に対して似たような要求を出す、最初はある国の階級が他の国の階級仲間について何か知る必要はない。徐々に似た利害を持つ者が接触しようとして、互いに綱領や論拠を受け入れ、共同の大会を催し、共通の委員会を設ける。

インターナショナルということは、この意味でも言われる。貸付資本の黄金のインターナショナルとか、農業者の緑のインターナショナルについて言われるのである<sup>〔原注11〕</sup>。とはいえ、全世界で似たような行動をするこの意識的な利害の相似性から、またインターナショナルな委員会の準備と組織という事実から、ただちに利益連帯や連帯行動を推論するならば性急であろう。しかし、とにかく似たような状態の人間は、国境を越えて、深い共感、強い共属感情、非常に親密な理解を結ぶのである。

高位の貴族層はどこにでもいる同格の人たちとインターナショナルな共同体を相変わらずつくっているが、その共同体は他の民族同胞を拒んでいる。世界の金融貴族層が互いに通婚し、他の民族同胞とは通婚しないほど、世界のすべての資産家は互いにそれだけ同格であると言える。彼らの間の婚姻では、無産の民族同胞との婚姻ほど不釣り合いな結婚と感じられるものはない。ドイツ人の伯爵がフランス人やイギリス人の伯爵とよりもドイツ人の市民と親密であり、ドイツ人の市民がフランスの市民よりもドイツ人のプロレタリアよりも親密であるということは、まったく真実ではない。家族共同体の問題での振る舞いについては、ローマ人の婚姻法（*jus connubii*）が確かな社会的指標であり、それはそのような主張の嘘をとがめている。全世界の同じ階級が互いに同格なものとして行動し、同じ国の二つの異なった階級はそうではなく、最高の血統貴族と金融貴族はまったくナショナルなところなく振る舞う。諸階級がインターナショナルであるということは間違いのない世界の事実である。しかし今日、諸階級はいまだ法的構成物ではなく、われわれの視界の下で——事実の法的な分野の下部において——育っている将来の法の単なる基体である。それは以前では、古代のローマ帝国とその法の内部におけるキリスト教や、中世開始以後の王家と市民（*regna und civitates*）に分かれたキリスト教世界の内部における民族（*Nation*）と同様である。しかしながら、この基体は今日のわれわれの観察の中心点にはない<sup>〔原注12〕</sup>。

国民（民族）経済とそれに基礎をおく階級構造は、諸民族の文化生活の基礎をつくる。そして文化生活こそ、言語という手段と固く結び付いているので、ナショナルな刻印を最も強く押されているもののなのである。ドイツ、フランス、イギリス、ロシア等々の哲学、文学、芸術について語るのは根拠のあることである。この文化の共同体は民族の親密な絆として現れ、それゆえにまさに民族は言語共同体に媒介された文化共同体であると定義される。そしてある特別な理由により、近代の人間の精神性は民族と結び付いている。すべてのヨーロッパの民族の古典文学は、まさしく封建的・身分的社会から今日の諸民族が分かれ出て、国家公民としての意識を持つようになる歴史的時期に生成した。イタリア人、オランダ人、スペイン人が、この発展における最初の者であった。そのすぐ後にイギリス人、フランス人が、かなり遅れてドイツ人が、19世紀の前半にロシア人が、後半にスカンジナビア人が、最後に他の諸民族が続いた。どの近代文学も民族の道徳的な誕生の時代に民族文学として世に現われ、その際、それより古い過去とその時代の宝物をさながら宝石箱のようにまとめ上げたのである。

しかし、ここでもナショナルなものななかのインターナショナルなものを過大視し、ある歴史段階に独特のものを、将来のすべての時代に無批判に押し広げないように注意しなければならない。われわれの民族文化には、すべてのギリシア・ローマの古典芸術だけでなく、すべての古い民族の、フランス人とりわけイギリス人の先行する古典が含まれる。シェイクスピアはわれわれに摂取され、われわれ自身の文化の見本である。誰よりも先にゲーテは世界中のすべての庭園から最も美しい花を集め、初めて「世界文学」という概念をわれわれに示し、その必要を主張した。ロマン派の作家たちはこの仕事を完成した。世界のすべての民族のなかで比べられないほどの翻訳や翻案の作業により、ドイツの美しい文学は、おそらく世界で最も普遍的で最もインターナショナルなものになった。

ドイツの古典哲学はデカルトやルソーをバイコンやヒュームに溶かし込んだもので、どんな民族（Volk）のなかに蒔かれたどんな精神的な種子をも不注意に脇にやることはない。当時の神聖ローマ帝国の政治的なみじめさはドイツ精神にとって利点となった。ドイツ精神は誕生したときから普遍的であり、人類全体が向かう世界精神であった。ドイツ精神の二人の英雄であるカントとゲーテは、これについての確かな証人である。したがってすでに初めからナショナルな精神世界のなかに、多くのインターナショナルなものが潜んでいるのである。

しかし古典派の時代以来、ヨーロッパのどの民族も多くの新しい者や異質な者を受け入れ、諸民族はまたその文化価値を交換し、民族文学の最良で最も独特なものが世界文学に入っている。その事実にあえて眼を閉じない者は、われわれが今日読む文学は世界文学よりも民族文学はずっと少ないこと、われわれの完全な陶冶の諸要素はインターナショナルであることを承認しなければならない。ドイツ人の一世代全体が、ゾラやフランスから、イブセンから、トルストイやドストエフスキーから教養を得て、今日では我々の思考に対する影響はドイツの古典のそれよりも強い。しかし戦後は、世界の文化と野蛮の共通の価値がすべての民族境界を超えてあふれ、それは初めて村にまで浸透している。ラジオと映画はこの発展の道具である。すべての国と言語の成功した役者や歌手は、ヨーロッパの山地、エジプトの農村、モンゴルの天幕の銀幕上に現われ、真に偉大な芸術家——現代的意味で！——は、その全生涯をかけて世界中で活動する。どの民族のものであろうと、大評判のどの研究成果も教育映画の形で全民族の前にただちに現われる。精神の共和国は本当に世界共和国になり、そこには国境も国家もない。

しかし学問の世界は、どんな制限もなくインターナショナルであり、インターナショナルなもの以外は無い。学問的な理論と実践は、まさしく現代を特徴づけるものであり、その特性なのである。

だから精神的なインターナショナルは現代の最も生き生きした現実である。書物を焼き、知的労働者を追放し、地元の天才たちの人工的孵化によってこの現実を廃棄しようという自惚れほど、愚かなことはない。そのような孵化によっては何事も達成できない。ある古い民族の内部で生み出されて価値のないものを世界に通用させようと要求することは、その民族自身にとっても真の意義をもつものではないからである。もっとも、若い諸民族においては別である。彼らは疾風怒濤の時代、古典派やロマン派やその他の発展段階を追体験せねばならず、したがって最高の業績は時代的に大民族の古典派以後の時代に生まれる。彼らは他の諸民族の影響の下であれ自分の芸術に従事し、その民族的特性によってそれを豊かにするほど、異民族の模倣に対して警戒するようになる。それゆえ若い諸民族の

場合には、特殊—ナショナルなもの国家による保護が確かに効果的なのである。だが、上述した精神的な循環がすでに出来ている十分に発展した諸民族は、世界で通用する業績によってのみ豊かにされるのである。

[原 注]

- [1] “Die Nation als Rechtsidee und die Internationale.” In Kommission bei der Wiener Volksbuchhandlung Ignaz Brand und Komp. このながらく絶版であった文書は、要約してこの章に転用されている。
- [2] “Deutschland und der nächste Krieg”, Seite 20.
- [3] ここでは方法上の理由から、さしあたり国際連盟の設立については度外視する。それについては後ほど議論する。
- [4] “Krieg, Marxismus und Internationale”, 2. Auflage, Seite 243ff. を見よ。
- [5] 社会主義の歴史では、インターナショナルとは1864年にロンドンで創立された国際労働者協会を示すが、ここではそれとは違った意味で使われている。
- [6] 少数のマルクス学徒だけが、当時までにフリート、シュッキング、ゴルトシャイト等の科学的な平和主義の諸著作に注意を払っていた。“Organisation der Welt” はシュッキングの本のタイトルである。
- [7] “Marxismus, Krieg und Internationale, 2. Auflage, Seite 261.
- [8] 同, 第9節 “Möglichkeit und Bürgschaften dauernden Friedens”, 第10節 “Wiederherstellung des Völkerrechts. Sein Ausbau zur Organisation der Welt”, 特に第10節第5項目 “Wissenschaftlicher Internationalismus und Weltorganizaition”. 社会民主主義的な党的批判は明らかにその時さし迫った時事問題によって時間をとられ、そのことについてはほとんど問題にしていない。科学的な研究というものは、時期はずれの預言のように思われた。
- [9] 特に第6節 “Imperialismus und Internationale, Die Einheit der Ökumene”。
- [10] “Nationalwirtschaft, Weltwirtschaft und Sozialismus, Berlin 1927.
- [11] 特徴的なのは、戦争のまっただ中で農業インターナショナルがローマで大会を開き、「敵同士」が平穏に一つのテーブルにつき、一緒に評議したことである。
- [12] ソヴェト連邦では階級は短時間で法的人格に上り詰め、法の君主として登場し、すぐさま新しい国家絶対主義に席を譲った。それについては、“Notrecht der Staatsgewalt und die Demokratie”, Zeitschrift für soziales Recht, 1. Heft 1933. を見よ。階級の法化の進捗の過程は、まだあまり研究されていないし、関連づけて叙述されることはまだまったくない。